

有機健康 つうしん

遠赤青汁通信 (H27.4.1発行)

支援は広く海外へ。皆様の想いを少しでも形にまいります。

遠赤青汁株式会社

〒791-0398 愛媛県東温市則之内甲2225-1
TEL フリーダイヤル **0120-148-162**
ホームページ <http://www.enseki.com>

インドネシアを青汁で救いたい

BOPビジネスは、「ベース・オブ・ピラミッド (Base of the economic pyramid)」の略で、低所得層を対象とする国際的な事業活動です。年間所得3千ドル以下で暮らす貧困層を対象に有益な製品・サービスを提供することで、生活水準の向上に貢献しつつ、企業の発展にもつなげる持続的なビジネスです。BOP層は世界人口の七割の約四〇億人に相当すると言われています。

インドネシアのバンタイエン県は、桜の植樹が縁で訪れた土地です。当時、県知事のヌルディン氏には大変お世話になりました。その後も交流は続

き、知事にも愛媛県を訪れていただきました。

バンタイエン県は、標高0〜2900メートルと起伏に富み、就業人口の半数以上が農業に従事するものの収入は低く、住民自体に野菜を摂取する習慣がなく、高血圧や糖尿病など生活習慣病の患者も多く、これらが課題となっています。

JICA (独立行政法人 国際協力機構) のBOPビジネス連携の認定を受け、今回一ヶ月の事前調査に高岡自ら出かけてまいりました。候補地のウルエレ郡は貧困率が40%と高く、平均標高が1400メートル。しかし赤道

直下のインドネシアにおいても、平均気温が15度前後と青汁の原料となるケールや、にんにくの栽培には適しています。

現地の風土や気候を感じながら、土地の人々に触れ、ケール栽培に欠かさない水や土壌の状況を調査してまいりました。

「これまで培った技術を移転し、貧困層の課題解決と海外ビジネス拡大、医食同源社会の実現を目指したい」想いは、強まります。

技術移転は三段階に分けて行います。第一段階は3〜4年かけて土づくりと有機認証を手掛け、農業技術向上と収入確保の基礎を作っていきます。

第二段階で洗浄・乾燥などの一次加工や粉碎・錠剤化など二次加工技術の導入による雇用創出、第三段階で健康補助食品としての定着をめざします。

今年から15年程度かかる予定です。高岡は今、七十二歳。その間のモチベーションをどうやって維持するのかと、他の経営者様からもご質問が寄せられています。

想いは決して消えません。皆様から寄せられる想いも一緒に届けているのです。今後、ご支援いただけましたら幸いです。



愛媛新聞の1面に紹介されました(2015.1.19) 著作物使用許可済



2012年11月に桜を植樹させていただいたのが縁となっています。



高岡自らインドネシアを訪れ、現地調査を行いました。キャベツ畑を視察して排水などを確認して、現地の農業事情を確認しました。



ミャンマー民族連合、ミャンマー農民発展党党首チョウ・スワ・ソウ氏を中心に協力を誓う、さくら振興議員連盟の皆様と高岡。



【汎アジア産業振興協会】
汎アジア産業振興協会は、日本の技術力と資本力を生かしてアジア諸国の経済を向上させることを目的とし設立されました。ホームページ <http://www.apaid.or.jp/>

ミャンマーに届け、平和の願い。
一〇〇〇本の桜の苗木をお贈りします。



2月2日、ミャンマー農民発展党と民族連合の代表に植樹の記念目録を贈呈致しました。

日本とミャンマーは、友好条約が締結されてから六十周年を迎えました。そして戦後七十周年を迎える二〇一五年、ミャンマーの仏教会、ミャンマー民族連合、ミャンマー農民発展党が中心となり、「終戦七十周年平和の式典」を開催することとなりました。

この式典を記念して、『陽光桜一〇〇〇本の苗木一〇〇〇本』を寄贈することになりました。

今回、さくら振興議員連盟と共に高岡が調印し、『陽光桜一〇〇〇本』の目録を、お贈りさせていただきます。

同時に、汎アジア産業振興協会様、さくら振興議員連盟様にもご協力をいただき、NPO法人「日本陽光桜交流協会」が発足しました。

これからも皆様のご協力の元、陽光桜を送り続けていきたいと思っております。それが、亡父高岡正明の願いでもありました。私の力の続く限り、世界中で陽光を咲かせたい。そう、願っています。何卒、ご理解ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

(代表取締役 高岡照海)

農地再生に

挑む

毎年、農場では新しい野菜に挑戦しています。今年は里芋。もちろん、有機栽培で育っています。

サイズは、料理に使うのも便利な大きさの小芋です。「これを六角に切つて煮たりしとるのを、料理屋さんでは見るよね。皮をむき、調理された状態の里芋を想像しながら、出荷作業が行われています。」

「なかなか、料理もわからん人には、袋詰め一つさせても、大きさがちいさすぎたり、しわしわのを入れてみたりと口で言っても伝わらないのよ」と木下。

この時期は、私の家でも里芋が毎日のように煮物になって食卓に出ます。やはり、食べやすいサイズがあり、大きいものは半分切るなど、調理をする気持ちで考えると出荷の時のヒント



商品を傷めないようにと、軽くふき取るように土を落としていきます。

「農地再生に挑む」では、放置された農地を再生し、有機園場として生まれ変わる様子をシリーズとしてお伝えしています。

になります。選別の意味をわかって作業することが大事ですね。

里芋は「女早生（おんなわせ）」と言う品種で、里芋栽培に最適な瀬戸内愛媛の肥沃な土と清らかな水・温暖な気候の中、大切に栽培され続けてきた在来種の里芋です。早生の蓮葉芋（はずばいも）で、丸く大きな果肉・上品な甘み・柔らかな食感・きめが細かいねっとりとした舌触りが特徴です。サトイモの葉は通常、垂直に垂れますがこの品種は蓮の葉のように丸く水平につくため蓮葉芋と呼ばれています。太陽の光を効果的に受けながら、早めに芋を作りあげます。

農場から掘り起こされた里芋は、周囲に付いている土を落としていきます。収穫の際に、傷がついてしまったり、水気が抜けてしわしわになってしまったものなどを省いて、ひとつひとつ状態



水分を失って、しわしわになった里芋。これでは、美味しく調理してもらえません。ひとつひとつ、土を拭きながら商品の状態をチェックします。

態を確認しながら袋詰めします。

有機の里芋は、首都圏の生協に出荷されています。近年、生協や大手スーパーなど、独自の販売ルートを持つ販売先への出荷も増えてきました。今まで、ケールやにんにくなどの有機申請で培ってきたトレーサビリティや有機農場の管理記録などが、安心・安全な食材をお届けしたい販売者様のニーズに合い、高い信頼につながっています。

これからも、たくさんの皆様に、美味しい、身体によい、安全な食材として有機野菜をお届けしたいと思っています。よろしくお願ひします。



安心・安全な有機栽培の目印、有機JASマークが商品に表示されています。



袋詰めされた里芋たち。袋には穴があいていて、ちゃんと息が出来るようになっています。もちろん出荷用の段ボールにも、空気穴があけてあります。野菜は生きています。

木下さんの

有機の話

農場のあちこちで火が起ってる！



おっと、農場のあちこちで煙がもつもうと上がっています。でも、その傍らでは収穫が行われていて、皆慌てるそぶりもありません。寒いからたき火かも？と思って聞いてみたら、全然意味が落ちていました。この圃場では、キクイモを収穫しています。

菊芋（キクイモ）は、菊に似た花をつけ、芋ができることから名づけられました。黄色い花が一斉に咲くので、遠目に見てもきれいです。ただ、芋は地下茎として育つのですが、土の上に出た茎が伸びる伸びる。私の背の高さを超え2m以上は伸びていきます。雰囲気と言えば細いヒマワリに似ています。それもそのはず、菊芋はキク科ヒマワリ属の多年草です。

この伸びた茎を刈って芋の収穫を始めるのですが、刈った茎が乾くととても固くなってしまいます。通常の流では刈った茎や葉は一緒にトラクターで土に鋤きこんでしまい、次の土作りをスタートするのですが、それも難しい固さです。仕方なく、別に拾い集めて燃やしていたのが、今回の煙でした。私も茎を拾ってみました。確かに固い火にかざすと簡単に燃えてしまいます。灰にして鋤きこんだ方が便利です。現場に行くと、聞いてみないとわからないことでした。農場には、いろいろな知恵が転がっているものですね。



キクイモは、にんにくの収穫の様にトラクターで掘り起こしたものをひとつひとつ拾っていきます。（手の中にあるのがキクイモ）



キクイモの茎は、茎が直立し1.5~3mに成長します。乾くと木の枝のようになります。土に鋤きこんでいくには、少し硬すぎて困ります。

EVENT

世界最大のオーガニック見本市に 今年も出展してまいりました！



会場入り口。世界各国から多くの方が集まります。さすがは、世界最大の見本市です。



日本ブースが分けられています。赤と白を基調としたデザインで日本らしさを演出しています。



各国のバイヤーさんに、熱く商品を売り込む高岡。粒を試食してもらって、またその良さを伝えます。通訳の方も負けじとがんばってくれました。

ドイツ・ニュルンベルクで二〇一五年二月十一日から十四日まで開催された、世界最大のオーガニック専門見本市BIOFACH（ビオファ）2015。遠赤青汁は、昨年に引き続いてJETRO（日本貿易振興機構）主催のジャパン・パビリオンに出展参加しました。

世界中から集まった有機の商品、食材、商材を求めて、世界各国からお客様が来場されています。今回は昨年の反省をもとに、「グルンコー」 「シユー・フリーセ」など、世界各国の言葉でケールを表現したパネルを作成。多種多様な言語のお客様への説明に大活躍でした。

青汁の試飲や黒にくの試食に関しては、まったくケールや黒にくの味に抵抗のないラテン系やスラブ系、試食に慎重なドイツ人など反応も様々。そしてケールと一緒にブレンドしていた青じそ（大葉）や、栽培中の山椒にも大変興味を持っていただきました。山椒の刺激的な味にも、平気な方、驚きを隠せない方も、反応が様々です。

現在、アメリカに始まったケールブームが、ようやくヨーロッパに浸透してきており、昨年とは違ってか



ケールを各国の言葉で表したパネルを展示しました。こんなにもたくさんの国に知られている野菜だということを実感しました。



四国八十八箇所 二十五番札所 宝珠山 真言院 津照寺

(ほうしゅざん しんごんいん しんしょうじ)

高知県室戸市室津2644



徳島から海岸線沿いを高知県に入り、室戸岬の24番札所最御崎寺をすぎ、港町に入ります。今までとは違った風情を感じる、漁船の停泊する港を通り抜けると、すぐ津照寺の長い石段が迫ってきます。立派な鐘楼門がのぼりとともにその中腹に見え、沖の船からもいい目印になるのではないのでしょうか？

港町で漁師の信仰を一身に集めてきたこの寺は、海難事故の多かったこの地の航海安全を祈って、弘法大師が創建したと伝えられます。大師手彫りの本尊・延命地藏尊は、初代土佐藩主・山内一豊の乗った船が暴風雨に遭遇した際、僧に化身して船の舵を取り、沈没の危機を救ったと伝えられており、楢取地藏（かじとりじそう）という別名があります。現在も津寺（つでら）の愛称で、近隣の漁師に厚く信仰されています。

台湾から、農場見学に来ていただきました。



日頃は、台湾で遠赤青汁製品を販売していただいている浜田給里さんが、愛媛県西条市の農場を見学に来てくださいました。

遠赤青汁では二〇一二年より台湾の百貨店で催事販売を開始しました。大平洋SOGO、新光三越など日本系の百貨店を回っています。台北、高雄、台中、台南と台湾中をめぐる販売の旅。

当初は弊社営業社員が出張して販売していましたが、次第に現地のメンバーも成長し、今では立派に営業スタッフとして頑張ってくれています。

「遠赤青汁の良さは、やはり栽培から加工、販売まですべて一つの会社で行っていること。農場に行くと、収穫も見れました。自分がしっかり確認できたことを、



ケールの収穫を体験しています。

お客様に伝えていきたい。この写真も、見せますね」と浜田さん。

農場は時折、雪が舞うほどの寒さです。台湾とは気温も違い、風邪をひいてしまうのではと心配しましたが、「しっかり着込んでいるから大丈夫」と、元気に収穫も体験されていました。

一週間の滞在の中で、ベトナムからの研修生とも仲良くなり、寮に泊まって食事を作ってくくださるなど、とても温かい雰囲気を持った方でした。販売についても、遠赤青汁の新しい取り組み等の情報を踏まえ、資料を作り直したり、写真を集めたりと忙しくされていました。今後の販売にぜひとも生かしていただきたいです。

浜田さんは、台湾で「遠赤青汁」



農場のみなさんと一緒に。



台湾の遠赤青汁FACEBOOKでも紹介されています。

<https://www.facebook.com/enseki.tw>

のFACEBOOKも発信しています。春節で獅子舞が販売コーナーに出没した楽しい写真も紹介しています。日本の農場を訪問したことも、現地の言葉でユーザーさんに伝えてくださっています。

遠赤青汁オンラインショップやブログ、日本版のFACEBOOKもチェックされています。遠赤青汁の情報を知らうという積極的な姿勢に、とても刺激を受けました。台湾と日本、良い情報交換が出来るように頑張ります。のんびりしていると、台湾から催促されそうです。これからも協力して遠赤青汁を広げていきたいです。

頑張る遠赤青汁

今年も挑戦、愛媛マラソン

今年も、マラソンの時期がやってきました。第五十三回愛媛マラソンが二月八日(日)に行われました。

愛媛マラソンは、全国のマラソンキングでも一位に輝いたことがあるほどの人気の大会です。今回から参加エントリーも一万人に増え、ビッグイベントとなりました。

昨年九月にエントリーが始まり、その後当選までを一喜一憂。二次募集も合わせて、今回遠赤青汁から出場したのは、精鋭三名。工場次長の近藤はもう三回目のベテラン、営業企画部の日野も昨年に続き二回目です。なぜか近年定着しているのが新人社員のマラソンチャレンジ♪本社工場製造部の林も無事エントリーでき、フルマラソン初挑戦となりました。

市民マラソンになった四十七回大会は、雨の中のレースでした。それ以降は大きく天候が崩れることはなかったのですが、今年は雨が降ったりやん



完走し、笑顔の三人。42.195km走って、日野は翌日からドイツ出張です。元気なもんじゃあ。

だりの悪条件。しかも二月の寒さと風も強く大荒れでした。ゴールのゲートが風で倒れるという事故もあり、全国ニュースで報道されるほどでした。

遠赤青汁ランナーズは、大体五時間の関門近くで待機。一番手に戻ってきたのは日野。私を見つめるなり「次長来た？まだ？」と聞きます。「次長まだ。日野君がトップ」と言うと、ガッツポーズで駆け抜けていきました。ど

だけ負けたくないんや(笑)遅れること一〇分で近藤、その後林と無事に皆、完走しました。すばらしい。

日野はフルマラソン二回目にしてサブ5(タイムとして5時間を切る)を達成し、遠赤青汁新記録を樹立しました。仕事が終わってからも、月に二〇〇キロ走りこんでましたからね。「練習は嘘をつかない」そんな言葉が頭に浮かんできました。来年も、頑張りますよ！



スタート直前、なんとも言えない緊張感がたがよいです。スタートしたら、見つけれそうにありません(笑)